

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00409

研究課題名(和文)「共感」の言説と文学—社会思想史的文学研究の可能性を探る

研究課題名(英文)Discourses and Literature of Sympathy--Exploring Social Thoughts in the Region of Literary Studies

研究代表者

大石 和欣(OISHI, KAZUYOHI)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：50348380

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：近代イギリスにおいてチャリティを含む「施し」の行為を支えた「共感」の心性は、啓蒙思想において社会的美德として称揚され、「感受性文化」のなかでも「同情」「憐憫」「情操」「仁愛」とともに道徳的価値を付与され、文学作品内にも組み込まれていった。ロマン主義文学において、共感は最初はそうした感受性の言語の上に、フランス革命期の「博愛」の概念とも結びつけられるが、やがて詩人たち自身の実存的問題を救済する美德へと転換され、功利主義やリベラリズム、それを反映した新救貧法に対する批判として機能しつつ、理想の共同体や教育のヴィジョンを構築していくことになった。その傾向はヴィクトリア朝文学にも流れこんでいる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「共感」を軸にしてイギリス1780-1850の文学を貧困や奴隷制、経済政策との関係を論じることで、文学テキストが持つ歴史的、社会的、文化的意義を横断的かつ斬新な形で提示できた。世界に貧富やジェンダーの格差問題が指摘され、グローバル化への反動から移民排斥を含む保守反動勢力の活性化も顕著な現代において、「共感」が包摂するさまざまな可能性と問題が18世紀後半から19世紀前半のイギリス文学にも看取できることを証明し、それが現代社会の「共感」の質とあり方にも関わる問題として論じた点でとくに意義がある。感情史研究の知見も組み込むことで新しい人文学研究として現代社会の問題につながる方法論も提示できた。

研究成果の概要(英文)：In modern England, "sympathy" was extolled as a social virtue facilitating acts of public charity in the age of Enlightenment. It was given moral value along with "pity," "compassion," and "benevolence" in the "culture of sensitivity," and was incorporated into literary works. In Romantic literature, sympathy was initially associated with the concept of "philanthropy" or "universal benevolence" disseminated in the age surrounding the French Revolution. It was eventually positioned as a virtue that remedied the existential problems haunting individual Romantic poets and writers and even served as a critique of utilitarianism and liberalism, which contributed to the installment of the new poor law, while at the same time being presented as the foundation for a vision of ideal community and education. The Romantic definition of sympathy eventually feeds into Victorian literature.

研究分野：イギリス文学

キーワード：ロマン主義 共感 慈善 女性 感情史 社会思想 博愛 チャリティ

1. 研究開始当初の背景

イギリス文学において「感受性」についての研究は古典的なものであり、「共感」の美德もその中で議論されてきた。Frederick W. HillesとHarold Bloomが編集した*From Sensibility to Romanticism* (1965)には、18世紀的感受性文学とロマン主義の共通項として「共感」を置く論考が所収され、R. F. Brissendenは*Virtue in Distress* (1974)において感受性の文学的表象を辿るなかで「共感」についても取り上げた。感受性文学における共感の意義はより包括的な形で、Janet Todd, *Sensibility* (1986)やJohn Mullan, *Sentiment and Sociability* (1988)、A. J. V. Sant, *Eighteenth-Century Sensibility and the Novel* (1993)において、Adam Smithを代表とするスコットランド啓蒙思想における共感の定義とともに論じられた。さらに90年代に入ると感受性が持つ文化的、あるいは政治的意義について、G. J. Barker-Benfield, *The Culture of Sensibility* (1992)は消費文化の枠組み内で、Chris Jones, *Radical Sensibility* (1993)は急進思想において共感が介在する実態を、Markman Ellis, *The Politics of Sensibility* (1996)は商業社会とジェンダーとの関係で検証し、またJerome J. McGann, *The Poetics of Sensibility* (1996)は新マルクス主義的立場から感受性の概念およびテキスト生成についての既成概念に疑問符を付した。だが、こうした20世紀の共感論は、身体と共感の関係、ジェンダーやセクシャリティの問題との関係、さらにはヨーロッパ全体の思想史的な動向のなかでの共感の位置づけについては踏み込めていなかった。21世紀に入り、Jonathan Lamb, *The Evolution of Sympathy in the Long Eighteenth Century* (2007)やMichael Frazer, *The Enlightenment of Sympathy* (2010)はそうした点について一定の視座を提供することになった。

しかしながら、上述の研究は文学研究の領域に踏みとどまるものであり、社会思想としての共感の位置づけについては不問に付している。貧困や慈善、さらには1834年に改正された救貧法をめぐる議論、植民地における抑圧といった社会史、植民地主義の枠組みのなかで共感がどのように言説上用いられ、社会の動向や政策、自治やチャリティに関わる組織運営と行動を規定し、意義づけ、概念化してきたかについては、いくつかの例外的研究を除けば未解明に終わっている。たしかにD. W. Elliott, *The Angel out of the House* (2002)やPatricia Comitini, *Vocational Philanthropy and British Women's Writing, 1790-1810* (2005)はチャリティに関わる女性のあり方を文学作品の中で検証し、Brychan Carey, *British Abolitionism and the Rhetoric of Sensibility* (2005)は奴隷貿易廃止運動に関わる言説がどのように感受性を修辭的に用いているかを明らかにした。だが、これらも貧困や奴隷制、急進主義、女性のチャリティ関与をくぐる歴史的な文脈と言説との関係については表面的な説明にとどまり、共感をめぐる議論についても部分的な考察に留まっている。

本研究の研究代表者はロマン主義時代におけるチャリティに関わる言説を研究してきたが、本研究では考察する社会的・歴史的な文脈とテキストを18世紀後半から19世紀半ばに拡張して、心性としての共感の位相と矛盾を複数のテキストの中から描き出すことを試みようとした。共感が日曜学校やリネン協会を含むチャリティ活動を促進し、フランス革命に共鳴した急進主義を推進し、奴隷貿易廃止運動を支え、功利主義に基づく自由主義経済を批判する文学的言説のなかで機能していたかは、史料のなかに浮かびあがっているが、共感が富者と貧者をどう媒介し、市民社会を構築するいかなる理念として措定されていたか、さらには近代社会において興隆する商業や産業、消費とどう関係づけられていたかについては、いまだ明瞭ではない。Benfieldが指摘したように風紀改善運動のような慈善活動が盛んになる背景に消費文化があるとすれば、共感消費社会が生み出す、あるいは浮き彫りにする貧富の格差や社会の亀裂を修正する情感として機能するのか、あるいはLawrence Sterneが*Sentimental Journey* (1768)において示唆したように物の交換と同レベルでの感情の交流、つまり「交感」として機能することで、「巨大な感覚中枢」としての社会の潤滑油として機能することを期待されていたのか、またベンサム功利主義が幸福の原理に措定する「快感」とどう差異化されることで功利主義やそれが加担する自由経済主義を批判する有機的な社会の美德として位置づけられるのかは、未解明な問いであった。

2. 研究の目的

本研究は、近代イギリスにおいてチャリティを含む「施し」の行為を支えた「共感」の心性が、政治的・社会的文脈のなかでどのように定義されたかを、18世紀後半から19世紀前半までの文学を中心とした言説のなかから抽出し、措定することを目的とする社会思想史的文学研究である。「共感 (sympathy)」はAdam Smithをはじめとした啓蒙思想において社会的美德として称揚され、「感受性文化 (the culture of sensibility)」のなかでも「同情 (compassion)」、「憐憫 (pity)」、「情操 (sentiment)」、「仁愛 (benevolence)」

とともに道徳的価値を付与され、文学作品内にも組み込まれていく。慈善行為を根底で支えたキリスト教的美德“caritas”と連動しながら、奴隷貿易廃止運動、功利主義や新救貧法に対する批判、労働者の住環境改善といったより多面的かつ世俗的な文脈のなかで言説化されていった。しかし、「共感」は個人の主観に胚胎され、公共圏において「想像の共同体」を構築する社会的美德でもありながら、狭量な対人関係に基づく親密圏を強固にする排他的感情にもなりうるという矛盾を持つ。この点については既存の研究では看過されてきた。社会との接面上で文学テキストが生成される時、そうした「共感」の言語がどのように機能しているのか。それを社会思想史の観点から感受性文学、ロマン主義文学、そして初期ヴィクトリア朝小説のなかに辿ることで、心性としての共感の位相を解明する。

3. 研究の方法

本研究は日常的世界における共感のあり方を射程に入れる点で、仏アナル学派の心性研究を継承しているが、問題とするのは文学を含む言説上で共感がどのように表象・定義され、社会道徳として位置づけられているかである。むしろ、救貧法の法体系や実態についての議論、チャリティに関する論議の中で共感がどう捉えられているかを辿ることで、歴史学において近年興隆した「感情史」の領域において、文学研究の立場から学術的貢献を果たせると考えてきた。共感については論じていないが、William M. Reddy, *The Navigation of Feeling* (2001) は感情を心理学や認識論の領域から文化人類学や歴史の領域にまで拡大し、感受性文学やロマン主義の文学テキストも検証した点で示唆に富む。また、日本語にも翻訳された Ute Frevert の *Emotions in History* (2011, 邦訳 2018) や同じドイツ語圏の研究 Jan Plamper, *Geschichte und Gefühl* (2012, 英訳 2017)、英語圏でこの新しい領域を牽引する Rob Boddice の *The History of Emotions* (2018)、Barbara Rosenwein and Riccardo Cristiani, *What is the History of Emotions?* (2018) も、哲学、心理学、社会科学、人類学、神経学と生理学、科学、言語学といった多領域を横断しながら、感情の歴史を俯瞰する。本研究はそうした新しい学際的なアプローチを取り込みながらも、文学研究としての立ち位置を見失うことなく、精緻なテキスト分析に基づき、「共感」という平凡でありながら特殊な感情が時代の文脈と感応しながらどう概念化されているかを考察した。

感情史研究の知見を参照しながら、社会思想史の観点から「共感」の位相を文学テキストから浮かび上がらせる学際性において本研究は独自のものであり、新しい知見を文学研究、社会史、感情史、社会思想史といった複数の領域に提示できる点で斬新かつ創造性を保持している。

4. 研究成果

「共感」を軸にしてイギリス 1780~1850 の文学、とりわけ女性作家による小説を含む言説を、貧困や奴隷制、経済政策との関係を論じることで、文学テキストが持つ歴史的、社会的、文化的意義を横断的かつ斬新な形で提示できた。世界に貧富やジェンダーの格差問題が指摘され、グローバル化への反動から移民排斥を含む保守反動勢力の活性化も顕著な現代において、「共感」が包摂するさまざまな可能性と問題が 18 世紀後半から 19 世紀前半のイギリス文学にも看取できることを証明し、それが現代社会の「共感」の質とあり方にも関わる問題として論じた点でとくに意義がある。感情史研究の知見も組み込むことで新しい人文学研究として現代社会の問題につながる方法論も提示できた。

感情は特定の歴史的條件に左右されないという普遍主義に対して、感情史研究者は特定の感情が文化や歴史、政治によって構築されているとする構造主義的立場に立つ。本研究も後者に近い立場だが、感情や概念が歴史によって決定される歴史決定論は掲げない。エドワード・サイードが『人文学とは何か』においてジャンバットィスタ・ヴィーコを援用して論じたように、人間はフーコーの言う不可視の権力やイデオロギー、あるいは歴史によって規定され、抑圧される一方で、それらに抵抗し、常に新しい文化と歴史を創造してきた。文学もその一端を担ってきた。「共感」もまた歴史的な文脈のなかで構築され、定義されながらも、同時にそうしたいわゆる下部構造に必ずしも従属せず、多様な情念や想像力、知性と理性をもった人間によって古い社会構造に抗い、それを批判し、ときに破壊し、新しい環境と文化を目指す原動力となっていたと考えている。フランス革命を支持したイギリスの非国教徒たちの言説、また彼らと親交を保ち、あるいはその影響を受けた初期の Wordsworth や Coleridge, Shelley たちロマン主義文学には、そうした批判的あるいは破壊的でありながら、創造力をもった共感が垣間見える。本研究は文学テキストを軸に、矛盾と軋轢を抱えながらも歴史と文化を改変・再構築する力を持った共感の位相をあぶり出せた。

本研究の全体をとりまとめる作業は今後も継続する予定であるが、3 年間の研究遂行期間においてまとめられた部分的な成果は以下の論文や学会発表、書籍所収の論文として公開することができた。

*18世紀前半の貧困問題とチャリティの実情をホガースの絵の中に読み込んだもの。

・(講演)「都市のリアリズム—ホガースと18世紀ロンドン」

特別展「近代ロンドンの繁栄と混沌(カオス)—東京大学経済学部図書館蔵ウィリアム・ホガース版画(大河内コレクション)のすべて」記念講演会、2023年6月17日(土)、於 東京大学駒場キャンパス、学際交流ホール

・(単著)「都市のリアリズム—ホガースと18世紀のロンドン」

『東京大学経済学部資料室年報』第14号(2024年3月)、3-21頁(無査読)

*18世紀中葉の福音主義の文脈における環境と共感の関係性を指摘したもの。

・(単著)“William Cowper and Suburban Environmental Aesthetics,” in Ve-Yin Tee (ed.), *Romantic Environmental Sensibility: Nature, Class and Empire* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2021), pp. 141-156.

*18世紀後半の奴隷貿易反対運動における共感の位置づけについて論じたもの。

(単著)「奴隷貿易とその廃止運動を再考する—チャリティと共感の観念史を通して」、國分功一郎・清水光明編『地球的思考—グローバル・スタディーズの課題』(水声社、2022年)、45-78頁。

*イギリス・ロマン主義における「共感」の位相を論じたもの。

・(パネリスト発表)「ロマン主義的政治思想?—ヘンサム、マルサス、コウルリッジ—」イギリス哲学会全国大会シンポジウムI「S・T・コウルリッジのロマン主義—近代社会の限界と可能性—」2022年3月19-20日(19日) 於 日本大学商学部 (Zoom)

・(単著)「ロマン主義的政治思想?—ベンサム、マルサス、コウルリッジ—」日本イギリス哲学会第46回大会 シンポジウムI「S・T・コウルリッジのロマン主義—近代社会の限界と可能性」報告 『イギリス哲学研究』第46号(2023年3月) 89-91頁。

・(招待発表)「共感のロマン主義—ワーズワスとコウルリッジにおける位相」日本英文学会全国大会 於 関東学院大学 2023年5月21日(日)

*シャーロット・ブロンテの小説『ジェイン・エア』における共感の位相

・(単著)「「共感」の矛盾と限界—『ジェイン・エア』における感情の問題」、小川公代・吉野由利編『感受性とジェンダー—〈共感〉の文化と近現代ヨーロッパ』(水声社、2023年) 277-303頁。

*19世紀半ばのジョン・ラスキンの思想に流れ込んでいるロマン主義的共感の経済的意義とコミュニティの位置づけについて論じたもの。

・「ヘレン・アリンガムのコテッジ表象とその系譜—ラスキンが見落としたもの」『ラスキン文庫だより』第82号(2021年10月): 1-7頁。(無査読)

・「オイコノミアと富の分配」『ラスキン文庫だより』第86号(2023年10月) 9-11頁。(無査読)

*感情史の領域においてイギリス18世紀~19世紀の共感を位置づけたもの

・学会発表(コメンテータ)「感情の共同体」の多層性と流動性」ワークショップ「イギリス女性史と「感情」」第35回イギリス女性史研究会 2021年6月26日 オンライン

・報告論文(単著)「コメンタリー—イギリス文学研究から見える感情史の展望と課題—」(特集 ワorkshop: イギリス女性史と「感情」)『女性とジェンダーの歴史』第10号(2023年) 26-28頁。

・(招待講演)「共感のリアリズム—ギaskell小説における心性と感情の史的考察」シンポジウム「感情とリアリズム—文学と歴史学の対話」リアリズム文学研究会主催、於慶應義塾大学日吉キャンパス来住舎、2024年1月27日

・雑誌記事論文(単著)「慈悲と共感の武士道」連載「武道を思索する」第16回『月刊 武道』第664号、2022年4月号 36-41頁。

・雑誌記事論文(単著)「怒りと義憤と憎悪と」連載「武道を思索する」第17回『月刊 武道』第665号、2022年5月号 14-19頁。

*19世紀末のトマス・ハーディの小説において農村コミュニティの貧困化と共感を求める女性の孤立化について部分的に論じたもの。

・(招待講演)「世紀末のコテッジと農村共同体—トマス・ハーディ小説における建築

- 表象」第65回日本ハーディ協会大会 2022年10月29日 於 名古屋大学
- ・(単著)「コテッジの世紀末—『ダーバヴィル家のテス』を中心とするハーディ小節におけるヴァナキュラーな建築物の表象」『ハーディ研究—日本ハーディ協会年報』第49号(2023年) 1-38頁。(査読有)

*それ以外に共感の位相に関わるもの(事典の項目記事)

- ・『啓蒙思想の百科事典』日本18世紀学会 啓蒙思想の百科事典編集委員会編(丸善、2023年1月)
 - (単著)ラディカリズム 452-53頁
 - (単著)奴隷貿易 468-69頁
 - (単著)博愛 528-29頁

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 10
2. 論文標題 コメンタリ イギリス文学研究から見える感情史の展望と課題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 女性とジェンダーの歴史	6. 最初と最後の頁 26-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 46
2. 論文標題 ロマン主義的政治思想？ ベンサム、マルサス、コウルリッジ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 イギリス哲学研究	6. 最初と最後の頁 89-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 664
2. 論文標題 慈悲と共感の武士道	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊武道	6. 最初と最後の頁 36-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 665
2. 論文標題 怒りと義憤と憎悪と	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊武道	6. 最初と最後の頁 14-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 666
2. 論文標題 「拍子」あるいはリズムと間	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊武道	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 667
2. 論文標題 道場という「間」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊武道	6. 最初と最後の頁 24-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 668
2. 論文標題 時代小説に潜在する武道の心性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊武道	6. 最初と最後の頁 16-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 669
2. 論文標題 品格と威厳の難しさ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊武道	6. 最初と最後の頁 50-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 670
2. 論文標題 呼吸についての煩悩を釈明する(1)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊武道	6. 最初と最後の頁 16-20
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 671
2. 論文標題 呼吸についての煩悩を釈明する(2)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊武道	6. 最初と最後の頁 16-23
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 672
2. 論文標題 背骨と姿勢の力学的・文化的構造	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊武道	6. 最初と最後の頁 24-32
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 499
2. 論文標題 「影」「響」という身体知	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 剣窓	6. 最初と最後の頁 q
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 655
2. 論文標題 以技伝心」 身体という言葉と言語の壁	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊武道	6. 最初と最後の頁 24-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 654
2. 論文標題 伝統の継承と刷新	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊武道	6. 最初と最後の頁 24-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 659
2. 論文標題 武将の「力」を考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊武道	6. 最初と最後の頁 32-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 14
2. 論文標題 都市のリアリズム - ホガースと18世紀のロンドン	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東京大学経済学部資料室年報	6. 最初と最後の頁 3-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 49
2. 論文標題 コテージの世紀末 『ダーバヴィル家のテス』を中心とするハーディ小節におけるヴァナキュラーな建築物の表象	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ハーディ研究 日本ハーディ協会年報	6. 最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石和欣	4. 巻 86
2. 論文標題 オイコノミアと富の分配	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ラスキン文庫だより	6. 最初と最後の頁 9-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 大石和欣
2. 発表標題 日常生活という遺産の継承 ナショナル・トラストのコテージ保存と戦略
3. 学会等名 文化遺産信託研究会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大石和欣
2. 発表標題 世紀末のコテージと農村共同体 トマス・ハーディ小説における建築表象
3. 学会等名 第65回日本ハーディ協会大会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大石和欣
2. 発表標題 Lafcadio Hearn and the Sea via English Romanticism
3. 学会等名 English Literature and the Pacific (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大石和欣
2. 発表標題 アカデミック・ライティングから東大英語教育を展望する
3. 学会等名 シンポジウム「東京大学の英語教育 - その現在と展望」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大石和欣
2. 発表標題 インタビュー "The Reception of Coleridge and Xanadu in Japan"
3. 学会等名 BBC Radio 4 "Xanadu" (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大石和欣
2. 発表標題 ロマン主義的政治思想? -ベンサム、マルサス、コウルリッジ
3. 学会等名 イギリス哲学会全国大会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大石和欣
2. 発表標題 (コメント)「感情の共同体」の多層性と流動性
3. 学会等名 イギリス女性史学会 ワークショップ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大石和欣
2. 発表標題 共感とチャリティの文化史研究とグローバル化時代の課題
3. 学会等名 東京大学グローバル・スタディーズ・セミナー(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大石和欣
2. 発表標題 ギヤスケルとチャリティー - 産業都市マンチェスターの言語空間
3. 学会等名 日本ギヤスケル協会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大石和欣
2. 発表標題 共感のロマン主義 ワーズワスとコウルリッジにおける位相
3. 学会等名 日本英文学会全国大会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大石和欣
2. 発表標題 都市のリアリズムーホガスと18世紀ロンドン
3. 学会等名 特別展「近代ロンドンの繁栄と混沌（カオス）ー東京大学経済学部図書館蔵ウィリアム・ホガス版画（大河内コレクション）のすべて」 記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大石和欣
2. 発表標題 共感のリアリズム ギャスケル小説における心性と感情の史的考察
3. 学会等名 シンポジウム「感情とリアリズム - 文学と歴史学の対話」（招待講演）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 小川公代 吉野由利、大石和欣ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 308
3. 書名 感受性とジェンダー 共感 の文化と近現代ヨーロッパ	

1. 著者名 日本18世紀学会 啓蒙思想の百科事典編集委員会	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善	5. 総ページ数 714
3. 書名 啓蒙思想の百科事典	

1. 著者名 Peter Cheyne, Andy Hamilton, Kaz Oishi &c	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 412
3. 書名 Imperfectionist Aesthetics in Art and Everyday Life	

1. 著者名 Tee Ve-Yin (Kaz Oishi)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Edinburgh University Press	5. 総ページ数 304
3. 書名 Romantic Environmental Sensibility: Nature, Class and Empire ['William Cowper and Suburban Environmental Aesthetics']	

1. 著者名 國分功一郎・清水光明（大石和欣）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 429
3. 書名 地球的思考 グローバル・スタディーズの課題 [「奴隷貿易とその廃止運動を再考する チャリティと共感の観念史を通して」]	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------